

釧路湖陵高等学校 釧路湿原巡検 実施内容

《概要》

[日程] 2017年6月29日(木)

[参加者] 理数科1学年40名

[単元] SSH科目「KCS基礎」

[釧路湿原巡検の目的] 湿原環境の保全を目的とした環境調査の手法を学び、環境科学における科学的な探究手法を研修するとともに、自らが生まれ育った自然環境を科学的に理解する機会とすることを目的とする。

[実施プログラムの概要]

8:54 達古武オートキャンプ場にてオリエンテーション、レクチャー

9:30 グループ毎にフィールドワーク(昆虫、沢の生物、エゾジカ)

14:20 夢が丘木道、夢が丘展望台でのレクチャー

16:30 研修終了

《実施内容(記録)》

※夢が丘木道、展望台の活動のみ抜粋

■全体活動～夢が丘木道を経て丘展望台へ(14:30)

(案内・解説:環境省 寺内自然保護官、北海道環境財団 山本)

二班に別れ、木道から見える環境を見ながら展望地を目指す。

○木道上～丘陵地と湿地の林から

木道を挟んで右側の丘陵地の林と左側の湖沿いの林では生えている木に違いがある。丘陵地には、ミズナラやカエデの木が多く見られ、これらは土砂と水環境が長い間安定している場所に生える所謂、山の木。一方で湖側の林は、ヤチハンノキの木が多く見られ、地面が水に浸る場所でも生えることができる。木の生えている地面を見ても、ジメジメとした湿地に



なっている。それぞれの樹種に適した環境があり、環境がどちらかに傾けば、その環境に適応した木が優占してくる。逆に言えば、生えている木を見れば、ある程度、その場所の土の環境、水環境を推測することができる。また、いずれの林も根本からいくつも枝分かれして幹が並んで伸びている木が多く見られるが、これは最初に1本の幹で生えた木が何らかの原因で枯れたが、根は生きていて、葉を失った木が危機を脱すべく、冬眠芽から芽を出し幹にまで成長したもの。ミズナラの木はよく萌芽を出すため、薪などとして多く利用されてきたが、そうした林はこのような萌芽林となっている。萌芽林の樹幹の太さから、ある程度樹齢が推定でき、いつ頃に当初の

主幹が枯れたのが想像できる。このように、樹種、樹齢、樹形から、今の環境と共に、かつてその場所でのどのような出来事があったか、そうした環境になってどのくらい経つかといったことも推測することができる。



○木道上～湧水

丘陵地から水の流れが湖に流れ込んでいる場所がいくつか確認できる。林の上の方から流れてきているわけではなく、木道のすぐ脇の丘陵地の斜面の間から湧き出ている、いわゆる湧水。沢グループではザリガニの捕獲を行ったが、沢の上流部もこのような環境にあった。小学校で森は緑のダムとして学習するが、森林があることで、落ち葉が分解してふかふかのスポンジのような腐葉土をつくり、また木の根がネットのように地面の下を網の目のように覆うことで、土が流れ出ることを防いでいる。森林は葉や腐葉土で降った雨を受け止め、じわじわと土地の低い場所に水を流している。調査体験の活動で、広葉樹、針葉樹の森について話題に出たと思うが、その作用は針葉樹の人工林よりも広葉樹の森の方が高いと言われている。こうした湧水を守るためにもこの場所では、ゆっくりと広葉樹の森へと誘導していこうとしている。

○木道上～ヤチボウズの群生

周囲の植生が生い茂って見えづらくなっているが、スゲの株が地面から盛り上がり、ボサボサ頭のように見えるヤチボウズが多く見える。6月頃に来ると、周囲の草も小さく、ヤチボウズが群生している様子がわかりやすい。スゲの株は何年も生きて成長していくが、株が冬に凍上して盛り上がり、春の雪解け水が流れる場所、増水時などに水が良く動く場所では、盛り



上がった根本の周囲の土が流水で削られ、とっくりをひっくり返したような形になる。これを繰り返すうちに、地面から大きく盛り上がった株が見られる。先ほどの丘陵地と湿地の林のお話と同様に、ヤチボウズが多く見られる場所は、水が良く動く場所だということがわかる。

○夢が丘展望台

調査体験を行った丘陵地、達古武湖、釧路川、釧路湿原が一望でき、これらのつながりを感じることができる。湿原を見ると、色や形は一様ではないことに気づく。大部分はヨシ・スゲの湿原であるが、色が茶色に近い部分は高山植物などが生えるミズゴケの湿原。川の近くにはハンノキの林があり、その林の高さにも違いがあることがわかる。こうした植生の違い



から、湿原内の環境は一様ではないことがわかる。湿地に生えることができるのはハンノキのみ

で、この樹種は水に強いが、成長するにはミネラルが必要で、山から土が流れ、ハンノキの生育を助ける。山際にハンノキが生えるのはミネラルが豊かなので当たり前だが、湿原の中に生えているのは当たり前のことではない。湿原に流れる川には、本来は土砂が多く流れてはこない。湿原の中央部は湿原であるはずだが、釧路川が上流から運んだ土砂がハンノキを育てている。農地や宅地の開発、河川の直線化などが原因となり、釧路湿原に上流から土砂が運ばれやすくなった。これらの人間活動は、我々が生活するという上で求められたことであり良い悪いという判断ができるものではないが、人間の責任でハンノキが増えていることは事実。こうした状況を食い止めようと自然再生事業が行われている。例えば、森林を保全することにより土砂を抑制し生態系を保全することが、湿原の保全につながる。山の栄養が川や湿原を育む。湿原を守るために、なぜ山を守るのかと当初考えた学生もいるかと思うが、生き物のつながり、水のつながりを考えると、全てが繋がってくる。こうした視点からも、自然再生事業は流域単位で取り組んでいる。



(質疑)

生き物が多く見られるのはいつの季節か (学生)。

生き物が見られなかったということとは、生き物がないということではない。それぞれの調査体験の中で、今まで見るできなかった生き物を見たり、その痕跡を感じたのではないだろうか。そうした意識や見つける技術が身につくことで、見ることができる生き物は増えてくる。展望台のすぐ脇で先ほどから鳴き続けている雛の声がするが、この声はアカゲラの幼鳥が巣立ち前に盛んに出す声。耳をすませば、かなり遠くまで聞こえる。この声を認識した皆さんは、これからは、そこにアカゲラの巣があるなと発見することができる。見えなかったものが見えてくる、つまり生き物を見つける眼鏡をかけることで、全く違ってくる。再生事業の取組みについても、同じことが言える。我々は小学校などでもお話をしたりフィールドを案内したりしている。湿原を見て、その雄大さや生き物の多さを感じることで、この先の将来にも湿原があって欲しいと思う。そうした思いを持って、湿原が持つ課題を知った時に、将来解決していく力になっていく。そうした意味合いからも、今日は皆さんと活動を共にさせていただいた。



■達古武オートキャンプ場駐車場着 (16:35)

■釧路市内へ出発 (16:50)